

ネットワークセミナー008 レポート

「学校の鍵は、住民に渡した。」

～コミュニティ・スクール 秋津小学校の挑戦～

- 日時:2010年3月7日(日) 15:00～18:00
- 場所:松陰コモンズ
- ゲストスピーカー:元秋津小学校長 宮崎稔氏

➤ セミナーレポート:

【セミナーに出席したCHCスタッフから、感想を含めて以下レポートします。】

2010年3月7日、小雨の降る寒い日曜日でしたが、松陰コモンズのお座敷に総勢40名ほどの方々が集まり、所狭しとお座布団を並べて第8回ネットワークセミナーが開催されました！

今回のお題は、

「学校の鍵は、住民に渡した。」～コミュニティ・スクール 秋津小学校の挑戦～ でした。

早速ゲストの宮崎さんの講演に入るかと思いきや、

今回はまず アイスブレイクセッション として、お隣の方とお互いの自己紹介を実施するところから開始。

仕事で幼稚園を作っている方や、地域のたまり場カフェを作ろうとしている方・・・、集まられたみなさん各々に地域や教育に大きな関心を寄せておられ、今回のセミナーに興味津々の様子。

場も温まったところで、ゲストの宮崎さん登場。

早速、秋津小学校長として地域に開く学校づくりを実践された過程やエピソードが紹介されました。

なぜ地域に小学校を開こうとしたのか？

まず、そもそも秋津小学校をなぜ地域に開こうとしたのか、その経緯からお話が始まりました。当時、秋津小学校は不登校児が地域で一番多い小学校であり、PTA や地域ともいさかいが多く、教員のだれもが赴任することを嫌がった、そういう学校だったとのこと。

宮崎さんは、子どもたち全員が楽しく学校に通えるよう、そして、不登校児をゼロにするには、もう地域の力を借りるしかない、と決心をしたのでした。

しかし、職員会議で地域に学校を開いていこう、ということをご提案した際には、なんと、校長と教員以外の全職員が反対。

そんな中でも宮崎さんは校長として、方向転換のリーダーシップをとったのです。

どんな風に学校は変わっていったのか

紆余曲折を経て、地域に開いた結果、学校がどうなったか。
あまりの変わり振りに、にわかには信じられないところもあるくらいなのですが、
TV で取り上げられた際の VTR も交えて以下のような光景が紹介されました。

- ・地域の大人が日常的に学校に入って身近に居る
- ・学校の間を利用して大人たち企画のサークルが当時で20くらい、今は50くらい活動
- ・休憩時間や放課後に子どもが大人たちのサークルに遊びに来る
- ・逆に子どもたちのサークルに大人が参加することも
- ・授業で先生が苦手な分野を、地域の大人がサポートして授業にも参加する(特に家庭科や工作など)
- ・地域の大人たち主体で「寝そべり図書館」建設など、設計から材料集めから建造作業までを担って、自主的に学校改善
etc.....

この結果、なんと地域で一番の問題学校だった秋津小学校は、
いつの間にか、不登校児ゼロを実現しそれを今も継続してしまっているのです。

学校だけでなく、思いがけない変化があちこちで..

そして、それに加え、当初の不登校児を無くすという目的の達成だけでなく、付随的に
こんな効果も現れてきたとのこと。

- ・住民が学校に集まることで住民間のふれあいが多くなり、地域のコミュニティがより強くなっていった。
- ・大人の楽しそうな活動を身近に感じ、子どもが学校を楽しい場所に。
- ・子どものみならず、親世代やお年寄りにとっての居場所、安心感、生きがいにも。
- ・情報を開いていくことで、先生と親との理解が深まり、いがみあうのではなく、助け合いに意識が向いていった。
先生にとっての負担も軽減された。
- ・地域が自主的に学校をメンテナンスする活動を始めたため、行政にとっても学校にお金がかからなくなった(!)

もう Win & Win どころではない変化です。
あまりの変貌振りに、宮崎さん自身も「いつもみんなに信じてもらえないのよ～、でもホントなの。」
と穏やかな口調で語られます。

なぜそんなことが可能だったのか？

ネットワークセミナー008 レポート

会場からは「あまりにスムーズにことが運んでるように聞こえるが、どこがポイントだったのか？」といった質問が。

宮崎さんからは、意外にも、まず、「率直な意見交換をしていったこと、その場が率直であることを浸透させていったこと」ということが挙がりました。

PTA や住民たちとの話し合いにあたり、本音でいかにぶつかりあうか、ということに心を砕いたとのことでした。
時には根回しをして喧嘩をしかけて、この場は率直に語り合う場であることを根付かせていったとお話が。

こういった場を通じて、色々な提案や問題の解決が行われていったようでした。

その中で宮崎さんたちが気をつけるようになったポイントの一つとして、「情報格差は作らない」ということも挙がりました。

学校におけるサークルやイベントの情報などを、まず地域全戸に届くよう媒体には気を配られたとのこと。

その一方、宮崎さんは、生徒の顔と名前を全員覚え、朝の登校時に校門に立ち、昨日休んだ子に声をかける、といった地道な活動も続けられていたとのことでした。

効果テキメンの処方箋などは無いもので、試行錯誤の中で取り組まれていった経緯が感じられました。

宮崎さんの「本当に不登校を無くしたくて必死だったんだよ…」という言葉が、なぜこの学校がここまで変わったのか、についての回答を一番表しているようにも思いました。

自主運営・自主管理がされていますが…

秋津小学校は、地域の大人たちを巻き込んで、色々な活動の場として自主運営・自主管理がされているわけです。

今回のセミナーの題でもあった「鍵は住民に渡した」。

サークル活動などにあたり、学校は地域の大人に教室の鍵を渡し、管理を委ねたのでした。また、様々なサークルや活動が、住民主体で発案され運営されているその事実。

どうして、そんな主体的な活動が定着していったのか…

宮崎さんは「楽しければ、みんなやるんだよね」とあっさりおっしゃいます。

しかし裏には、そのように住民が感じられるようにもっていく色々な工夫もあったことが垣間見られました。

ネットワークセミナー008 レポート

まず発想として、「200日×8時間のコミュニティ・スクール」から「365日×24時間のスクール・コミュニティ」への転換。

また、仕組み面においては、教室の利用ルールを決める際などの話し合いにおいては、多数決はとらないということを取り決められていたそうです。

ずっと生活の一部として続いていく地域活動においては、多数決は望ましくないとのこと。

その他、コミュニティ活動保険加入など、活動を安心して継続していくための細々とした心配りが随所に感じられました。

人材、地域、教育って…

流れの中で、様々な分野に話題が波及したのですが、色々な印象深い言葉がありました。なかなか全部を紹介しきれないのですが、そのエッセンスを以下に…。

人材とは…

学校を開いてみると、住民の中からは「技術のある人は学校で役に立つけど、私はそんな技術も無いし…」と参加することをためらう方もいらっしゃったそうです。

宮崎さんは、そんな方々にみな参加していくことの大事さを説かれていったようです。例えば、特に技術が無くてもそのおかげで子どもがその人に何かを教え、子どもの自信になることもあるわけです。

全ての人が人材である。
その言葉に救われた住民も多かったのではないのでしょうか。

人間経験を

現代の子どもに足りない経験としてよく自然体験があがりますが、宮崎さんは、今の子どもには圧倒的に「人間経験」が足りないのではとおっしゃいました。

子どもが様々な世代の色々な大人の姿に接すること、大人のダメな部分も含めて、経験していくことが成長には大事なのでは、と。

逆に、大人が、子どもの前で振舞うことも少なくなっているのが現代なのかもしれません。子どもの前ではみない大人になるもので、そのことも、我々には重要なことかもしれません。

高齢者福祉とは

誰かの役にたてていることを実感しつつ生きていくこと、それが本当の高齢者福祉なのでは、とのお話もありました。

その解決のヒントがコミュニティスクールにはあるように思います。

被害者を出さないのではなく、加害者を作らない社会を

地域社会では安全対策として、まず被害者を出さないようにする方策を考えますが、大事なことは、加害者をいかに作らない社会をつくっていくか、ということではないのか、との問題意識も話されました。

地域の力が落ちているといわれる現代だからこそ、響くものがありました。

最後に

宮崎さんのお話の後には、数名のグループに分かれて共有セッションを行い、感じたことをみなで話合う機会も設けられました。

本当に楽しい含蓄に富んだお話で、ここでうまく紹介しきれない内容もたくさんあるのですが、最後に、CHCの観点から、今回のお話を切り取って、コレクティブハウジングにおいて参考になるポイントを挙げてみたいと思います。

- ・まず何をにおいても、目的を共有することの大事さ
- ・話合いの場の重要性、率直になることの大切さ
- ・ルール作りの過程の重要性
- ・すべての人に役割があること、役に立てることの大事さ

これからのCHCの活動へも大変示唆に富み、考えさせられるセミナーでした。

そしてお忙しい中お時間をつくって駆けつけてくださり、素敵なお話を下さった宮崎さんに大感謝です！

以上